

# ヴィクトリー・プレイセンターにおける Japanese Sessionの先駆的実践

佐藤 純子

(2013年10月3日受理)

## 要約

本稿では、ニュージーランド、ネルソン市のヴィクトリー・プレイセンターで Japanese Session (以下、日本語セッションと記す) を開催する「たんぼぼ」を調査対象としている。調査では、ニュージーランドにおいて日本人がプレイセンター活動をするものの意義や日本の活動者との相違を明らかにすることを通じて、日本におけるプレイセンター活動への示唆を得ることを目的としている。調査方法は、スーパーバイザーたちや参加する親たちへの聴き取り調査、グループインタビュー及び質問紙調査を行うこととし、日本語セッション設置に至るまでの経緯、対象者の属性と活動に対する意識、活動評価、課題や抱負などを確認した。その結果として、どちらの国の参加者も「親子と一緒に活動し、共に成長しあうこと」や「仲間づくりの拠点としてプレイセンターを活用すること」が活動を通じて成し遂げられていたことがわかった。

今回調査を行った日本語セッション「たんぼぼ」では、セッションをリードするスーパーバイザーらが活動を円滑にするための中心人物となっていた。また、プレイセンターというシステムがすでにニュージーランド社会のなかで一定の地位を得ていることやプレイセンターの遊び環境が常設で確保されている点が「たんぼぼ」の活動発展への助力となっていた。以上のことから、親が主体的に活動できるように運営の支えに回る人材を確保することやプレイセンター専用の施設を用意することが、日本国内のプレイセンター活動には求められることが明らかとなった。他方、日本語セッション「たんぼぼ」においては、親向けの学習がなかなか浸透しない傾向にあるため、「親学習」と「親による協働運営」をさらに徹底させていくことが、今後の「たんぼぼ」に課せられる課題であることが示される結果となった。

キーワード プレイセンター、日本語セッション、協働保育

1

## 1. はじめに

ニュージーランドでは、1986年に幼保一元化がなされたが、施設の統合という形ではなく、

保育や教育の多様性や固有性は残していく上での幼保一元化が実現した。そのため、今もなお、さまざまな運営主体のもとに多様な就学前教育が実施されている。なかでも、特にユニークな活動を展開しているのがプレイセンターである。プレイセンターとは、1941年に始まった親が運営を担う幼児教育施設を指す。プレイセンターでは、専門職である保育士や幼稚園教諭を雇わずに、親が学習コースを受講しながら子どもの保育・教育を担当している。

わが国では、少子化の影響からここ20年余りの間に子育て支援事業の取り組みが飛躍的に進んできた。しかしながら、そこには親自らが主体となり施設運営を担うという発想がなかったために、親たちが支援者や保育者になるような取り組みは殆ど着手されてこなかった。

2000年を過ぎると、プレイセンターの理念である「家族と一緒に成長する（Families growing together）」に賛同した研究者や活動者らが中心となり、日本におけるプレイセンター活動が始動された。さらに、日本のプレイセンター活動を支援する組織としてプレイセンター協会が設立された。その後、2013年になると当該協会は、法人化を果たし、日本にあるプレイセンター活動の普及と安定化を図るための体制づくりが整えられた。しかしながら、日本国内においてはプレイセンター活動がなかなか普及せず、今もなお全国に約10か所のプレイセンターが活動しているに過ぎない。プレイセンターの普及を拒む原因としては、①ニュージーランドと文化や習慣が異なる日本においてプレイセンターを導入することが難しい点、<sup>1)</sup> ②親を客体とする事業が一般的となっている日本の子育て支援の現況のなかで、親たちの負担が多いとされるプレイセンターの実施が現実的ではないとする点が指摘されている。<sup>2)</sup>

以上のように、日本においてプレイセンター活動を展開することに対しては、ある程度の困難が伴うことが認められる。しかし、その一方で、日本のプレイセンター活動から得られる成果についても言及されている。例えば、プレイセンター活動における互酬性が親たちの潜在能力を開くとともに親同士のつながりを醸成し、地域コミュニティにとって有益なソーシャル・キャピタル（社会関係資本）を創出していることが明らかとなっている。<sup>3), 4)</sup> それゆえに、日本に馴染まないことだけを理由にして活動を推進していかなければ、子育て分野におけるソーシャルキャピタルの損失を招くことに結びつく。つまり、乳幼児を持つ親たちの力を発揮する機会をも奪うことにつながるということになる。

本稿では、ニュージーランドに489ヶ所（2012年現在）あるプレイセンターのうち、唯一、日本語セッション（既述のとおり、会の名称は「たんぼぼ」）を開催しているネルソン市のヴィクトリー・プレイセンターに着目している。本調査の目的は、「たんぼぼ」に参加する日本人家庭にとって「プレイセンターはどのような意味を持つのか」、メンバーたちは「日本のプレイセンターと同じような運営上の課題<sup>5)</sup>を抱えているのか」を解明することにある。さらには、「自治運営」による義務や負担が多いとされるプレイセンターの活動<sup>6)</sup>に対して、「たんぼぼ」の参加者も「学習や運営への負担を感じながら活動をしているのか」などを探り、両国の日本人活動者の比較検討を行いながら、日本で活動するプレイセンターへの示唆を得ることにある。

## 2. 研究方法

本稿の調査は、ニュージーランドのプレイセンターで活動する日本語セッション「たんぼぼ」への実地調査を通じて、その活動実態や参加者の意識を探ることを目的としている。具体的には、2013年6月に筆者がニュージーランド、ネルソン市を直接訪れ、活動を先導する役割を担うプレイセンターのスーパーバイザーとアシスタント・スーパーバイザーに対する半構造化インタビューを試みている。他方、日本語セッションに参加する親に対しては、グループインタビュー及び質問紙調査を実施している。上記に加え、ヴィクトリー・プレイセンターの通常のセッションと日本語セッションの両方の活動にも参加をし、参与観察を行っている。

対象者となるスーパーバイザー1名、アシスタント・スーパーバイザー1名に対するインタビュー調査は、プレイセンターの事務所内や調査対象者の自宅にて行っている。また、参加する日本人の親たちに対する調査は、セッション中やプレイセンターのない午前中にカフェなどで行った。だが、全ての参加者に対して聞き取り調査を実施することは、時間的制約もあり困難であると判断されたため、小規模な質問紙調査についても実施することにした。なお、質問紙調査では、9家庭のうち8名の親に協力を得ている。

スーパーバイザーやアシスタント・スーパーバイザーに対する調査項目は、①日本語セッションの設立経緯、②ライフストーリー、③日本語セッションの運営方法、④日本語セッションに通う親子像、⑤日本語セッションの活動評価と今後の課題などを中心に構成した。一方、参加者に対しては、①参加動機、②参加者の属性、③親子の一週間の流れ、④参加効果、⑤プレイセンターに対する期待や要望、⑥他の親子との関係性、⑦学習意欲、⑧ニュージーランドで子育てしていく上で大切にしていること、⑧日本のプレイセンター活動に対する考えなどを調査項目として設定することにした。

## 3. 結果

### 3-1 ヴィクトリー・プレイセンターにおける日本語セッション「たんぼぼ」の概要

ヴィクトリー・プレイセンターでは、月曜日の12:30~15:00に日本語セッション「たんぼぼ」を開催している。活動のねらいとしては、①遊びを通して日本語や日本文化を体験する、②プレイセンターの基本理念 (Parents are the first teachers of their children: 親は子どもにとって人生最初に出会う教師である) に基づきながら互いの家族が共に学び合う、③コミュニティとしての場づくりの三点を掲げている。

現在、「たんぼぼ」には、9家庭15人の子どもたちが活動に参加している。ヴィクトリー・プレイセンター (通常セッション) の参加費は、学期 (10週間) ごとに1家庭70ドルと設定している。しかしながら、「たんぼぼ」に参加している家庭は、週1回の日本語セッションのみに参加する者が大半となるため、1学期につき1家庭30ドルを参加費として徴収している。

ニュージーランドでは、学童期になると小学校に付属した日本語補習校において日本語や日本文化を学習する場が用意されている。しかしながら、就学前の子どもに対しては、一部の大都市で日本語幼稚園が数園存在するにとどまっている。つまり、殆どのニュージーランドの都市では、日本語や日本文化に特化した幼児教育の機会がなく、親たちが自主的に育児サークルや子ども会を立ち上げているのが現状となっている。そのため、「たんぼぼ」に参加する親たちも、幼児期の子どもに日本語や日本文化に触れさせる機会を増やすことを目的として入会する者が多い。現在のメンバー構成を見てみると、参加者の全員が日本人または、日系人の母親で構成されている。ところが「たんぼぼ」では、日本人の親であることを入会要件としておらず、むしろ日本文化や日本語に興味を持つ親であれば、どのような文化的背景を持つ家庭でも受け入れたいとしている。

「たんぼぼ」の活動は、プレイセンターの理念に基づきながら子どもたちに日本の文化を伝えたいとする親たちとその家族によって行われている。具体的には、プレイセンターの通常セッションで行われている遊び（分野別の設定遊び）に加え、日本語による手あそびやわらべうた、絵本の読み聞かせ、日本の行事体験（お正月、節分、雛祭り、お花見、こどもの日、七夕など）、伝承遊び、お団子・おにぎり・カレーライスなどの日本食作り（日本食の伝承を通じた食育）、遠足などを行っている。

日本語セッションの開催にあたっては、スーパーバイザー（保育や運営を導く役割の者）とアシスタント・スーパーバイザーの他に当番制のペアレント・ヘルプ（その日の主活動や絵本の読み聞かせを担当し、活動日誌をつける役割の親を示す）を1名置き運営をしている。現在、ペアレント・ヘルプには、「たんぼぼ」に登録する9家庭のうち、5名の親が名乗り出て、その役割を担っている。将来的には、9名全員の親が当番のローテーションに加わることを目標としている。しかし、乳児がいる家庭や当番を負担に感じる親もいるため、無理なく運営を行っていきたいとの会の方針により手あげ方式をとることにしている。この他の係としては、会計やブログ担当、イベント係がいるが、それらの担当者についても立候補によって決定している。

学習コースの受講については、まだ一部の親しか受講に至っていないのが現状となっている。しかし、今後、セッション中に講座を持つなどの工夫をし、全員の親に講座受講の努力義務を課したい（プレイセンターの通常セッションと同じように少なくともコース1の修了を目指す）とスーパーバイザーたちは考えている。

「たんぼぼ」で実施されているセッションは、プレイセンターとして政府から認可を受けた幼児教育施設の一活動となるため、地域のプレイセンターを統括するプレイセンター協会や全国組織となるプレイセンター連盟からの支援や助言を受けながら運営がなされている。日本文化を母体とするプレイセンターは、ニュージーランド全土でただ一つとなるため、日本語セッションに関する他の活動との交流はないが、ヴィクトリー・プレイセンターの通常セッションとの交流や仕事の分担などは積極的に行われている。また、同じ地区にあるプレイセンターとも親の学習コースを合同で実施したりするなど定期的な会合の場が設けられている。

### 3-2 ヴィクトリー・プレイセンターにおける日本語セッション開設の経緯

日本語セッションの設立にあたっては、アシスタント・スーパーバイザーであるYさんが発案し、スーパーバイザーであるTさんがその案に賛同したという過程を経ている。筆者が二人に行ったインタビューのうち、設立に関わる語りをそれぞれのライフストーリーを踏まえながら以下に示すことにする。

#### 【アシスタント・スーパーバイザーYさん】

日本人のYさんは、同じく日本人である大工の夫と2001年9月にニュージーランドへ移住。二人の男児（現在10歳・6歳）をニュージーランドで出産した。下の子が3歳の時に、ネルソン市に越してきている。その当時、上の子は家庭内で日本語を話すことが多かったが、下の子は殆ど話すことがなかったとYさんは述べている。このことが日本語セッションを開設しようと思うようになったそもそものきっかけであるという。その後、Yさんは、ネルソン市に住む他の親たち4～5人と小学校へ入る前の子どもたちに向けて日本語を話す環境づくりに着手した。具体的には、それぞれの家を会場に持ち回りで絵本の読み聞かせや工作などを行った。しかし、安全面や会の継続性を考えると公共の施設でやった方がよいのではないかと考えるようになり、当時参加していたアタファイ・プレイセンターに日本語セッションの開設について相談を持ちかけた。アタファイ・プレイセンターからは、「ぜひ、協力させてほしい。このセンターには、セッションの空きがないので、代案としてヴィクトリー・プレイセンターを紹介したい」との回答を得た。早速、Yさんは、ヴィクトリー・プレイセンターのスーパーバイザーであるTさんと連絡をとり、2011年6月より日本語セッションを開設することにした。

#### 【スーパーバイザーTさん】

ニュージーランド人であるTさんは、ヴィクトリー・プレイセンター以外にもネルソン地域にあるいくつかのプレイセンターでスーパーバイザーをしている。さらにTさんは、学習コースの講師や乳児セッションの指導員、地域を統括するネルソン・プレイセンター協会の役員としても活躍している。Tさんには、パン屋の夫とプレイセンターで育った3人の子どもがいる。実子となる13歳の男児の他には、二人の養子の娘（20歳・8歳）がいる。20歳の娘はすでに家を出て自立している。Tさんは、この8年の間に20名の被虐待児の里親となり、子どもたちの養育を通じて地域の児童福祉に貢献している。

Tさんが日本語セッションの立ち上げに関わるようになったのは、2年前（2011年）のことになる。Tさんは、同地域のスーパーバイザー仲間より「アタファイ・プレイセンターに通うYという日本人のお母さんが日本語セッションを始めたいと言っているよ。あなたのセンターで受け入れたらどう？」と打診された。Tさんは、その提案に対し、何の迷いもなく承諾したと語っている。なぜなら、ヴィクトリーの地区には様々な文化的背景を持つ家族が多いため、日本語セッションを実施することで、自分たちのコミュニティがよりよくなるのではないかと考えたからである。Tさんは、「それぞれの文化が大切にされ、誰もが受け入

られているという感覚を持つべきだ」とYさんに伝え、TさんとYさんは日本語セッションの実施に踏み切ることにした。

### 3-3 日本語セッション「たんぼぼ」に通う参加者像と活動評価

日本語セッション「たんぼぼ」に参加する家族の属性については、グループインタビューと質問紙調査の回答を整理し、表1に示すことにした。

次に、「たんぼぼ」に参加を決めた動機や活動に対する評価について、親たちの回答を以下に記すこととする。

- ① プレイセンターの日本語セッションに参加しようと思った理由
  - ・日本語の環境に触れさせ、子どもに日本人の友達を持たせたいと思ったから。
  - ・他の地域から引っ越したため、親子ともに仲間を求めているから。
  - ・子どもに日本語で遊んだという思い出を残してあげたかったから。
  - ・親も参加でき、一緒に遊ぶことができるから。
  - ・プレイセンターの内容は詳しく知らなかったが、日本語の環境が親子共に良いと思ったから。
- ② 参加してよかった点
  - ・いろいろな親と育児の情報交換、交流や悩みの共有ができる点。
  - ・自分と同じ背景を持つ友人を持つことは、子どもにとって心強く、誇りとなる点。
  - ・子どもがのびのびと遊んでくれる点。
  - ・家の中ではさせたくないペイントや砂遊びを思いっきりさせられる点。
  - ・親も一緒に参加するので、ゆっくりと子どもとの時間を過ごすことができる点。
  - ・娘が話すつたない日本語を理解してくれる大人がいる点。
  - ・子どもが日本語に触れる機会が増えた点。
  - ・日本人の友達が増え、食事やコーヒーを飲みに出掛けることが出来るようになった点。
- ③ 他の施設にはない、「たんぼぼ」の特徴とは何か
  - ・アシスタント・スーパーバイザーの人柄がよく、大らかで温かく参加しやすいところ。
  - ・キッチンを使って、野菜スープやマフィンづくりなど料理ができること。
  - ・スーパーバイザーの二人が、各子どもに記録ファイルを作ってくれること。
  - ・「皆で（子どもを）見ている、皆で育てる」ところがプレイセンターのよさであり、特徴。
  - ・親子参加型なので幼い息子も安心して遊べること。
  - ・異年齢で遊び、子ども同士で学びあうことができること。
  - ・他の子どもたちの成長が見られること。
  - ・日本の本を読んだり、歌を歌えること。
  - ・親主体ということで、自分も子どもにとって何が良いのかを考える時間が増えた。
  - ・遊びの種類が充実しているところ（外遊び、室内遊び）。

表1 日本語セッション「たんぼぼ」参加家庭の属性 (2013年6月現在)

対象者	対象者を除く 家族構成	参加する 子ども	NZ居住に 至る経緯	活動年度	役割・係	一週間の過ごし方	
Kyさん	夫 (イギリス人) 長女 (5歳7ヵ月) 長男 (2歳8ヵ月)	長男	OLを経て28歳の時、ワーキングホリデーでNZへ。イギリス人の夫と結婚、2006年に移住。	2011年 ～現在	*会計 *ペアレント・ヘルプ	月：プレイセンター 水：育児サークル その他、姉のジム等と一緒に連れていく。	
Moさん	夫 (日本人) 長男 (1歳5ヵ月)	長男	新婚旅行でNZに来た際、夫がNZのライフスタイルを気に入り移住を決定。	2013年6月 ～現在		月：プレイセンター 水：育児サークル	
Hkさん	夫 (NZ人) 長女 (4歳) 次女 (3歳)	長女 次女	大学3年時、カナダに半年間語学留学。卒業後、NZでワーキングホリデー。NZ人の夫と結婚する。	2011年8月 ～現在	*ブログ担当 *ペアレント・ヘルプ	(長女) 月～金：幼稚園 月：プレイセンター 水：育児サークル 木：バレエ	(次女) 月：体操クラス・プレイセンター 火・木・金：幼稚園 水：育児サークル
Nkさん	夫 (日本人) 長男 (6歳) 次男 (4歳) 三男 (0歳)	次男 三男	日本の商社で働く夫が転勤となり、2010年よりNZで暮らす。	2011年 ～現在	*ペアレント・ヘルプ	(次男) 月：スイミング・プレイセンター 火～木：保育施設 金：体操教室	(三男) 月：プレイセンター
Yiさん	夫 (日本人) 長女 (6歳) 次女 (4歳) 三女 (1歳)	次女 三女 (長女：小学校入学前参加)	日本の高校を卒業後、NZへ留学・就職。日本人の夫と結婚し、移住する。	2011年 ～現在		(次女) 月～金：幼稚園 月：プレイセンター	(三女) 月：プレイセンター
Mhさん	夫 (NZ人) 長女 (2歳)	長女	28歳の時、ワーキングホリデーでNZへ。NZ人の夫と出会い結婚、出産する。	2013年3月 ～現在	*イベント係	月：プレイセンター 火：家で遊ぶ、友達親子と公園等で遊ぶ、家族で公園等へ行く。 水：父親と過ごす日 (母仕事) 木・金：終日・保育施設 (両親仕事)	
Miさん	夫 (日本人) 長男 (小学生) 次男 (3歳)	次男 (長男：小学校入学前参加)	9年前に、夫とともにワーキングホリデーでNZへ。永住権を取得し、移住する。	2011年 ～現在	*ペアレント・ヘルプ	月：午前 保育施設 午後 プレイセンター 火：午前 保育施設 午後 体操教室 水：午前 英語プレイグループ 午後 日本語プレイグループ 木：午前～午後 保育施設 金：午前 音楽教室 午後 特になし	
Msさん	夫 (NZ人) 長男 (4歳半) 長女 (3歳半) 次女 (7ヵ月)	三人 全員	日系ブラジル人であるMsさんは、高校卒業後三年間日本で出稼ぎをする。その後、ブラジルの大学に進学。休暇で来日の際、NZの夫と出会う。大卒後、NZで結婚・移住。現在結婚して14年が経過。	2011年 ～現在 (日本語セッションが設立される前は、リッチモンド・プレイセンターに参加していた)	*ペアレント・ヘルプ	(長男) 月：午前 家庭 午後 プレイセンター 火：保育施設 水：保育施設 木：保育施設 金：午前 スイミング・運動・買い物 午後 家庭	(長女) 月：午前 家庭 午後 プレイセンター 火：午前 音楽教室 午後 体操教室 水：午前 保育施設 午後 家庭 木：家庭 金：午前 保育施設 午後 家庭
						三女は、プレイセンターや家庭で過ごす。	

④ 参加者家族の相互の関わりについて

- ・セッション以外でも行き来する仲になった。
- ・個人的に遊ぶ友だちもいれば、遠くに住んでいるためプレイセンター内だけで会う友だちもいる。
- ・平日、夫が車を使っているため、メンバーがプレイセンターへの送迎をしてくれとても助かっている。
- ・いざというときに、連絡できる知り合いが増えたことがうれしい。
- ・水曜日のプレイグループで交流する他、預けあいや子ども同士を遊ばせる等、頻繁に関わっている。
- ・預け合いをしたり、セッション以外でも遊んでいる（特に学校が休みの時）。困ったときは助け合い、レシピ交換や新しい店・製品などの情報交換も行っている。

⑤ 参加効果について

- ・私（母親）に余裕ができ、息子が以前よりリラックスした感じになった。
- ・日本の感覚を自然に身に付けられ、子ども自身、よいバランスを保っている。
- ・他の大人に慣れてきた。
- ・プレイセンターでは、ダイナミックに遊び、どんなに服が汚れても大丈夫と（子どもの遊びを）見ていられるようになった。
- ・他の子どもと接する時間が増え、子どもの育ちも親の育て方もそれぞれ違うことを教わった。

### 3-4 「たんぼぼ」の活動と参加者についてのスーパーバイザーによる見解

スーパーバイザーのTさんとアシスタント・スーパーバイザーのYさんは、参加する親たちや「たんぼぼ」の活動実践をどのように捉えているのだろうか。スーパーバイザーたちから得た参加者像に関わる語りを整理し、次に示していきたい。

#### 【スーパーバイザーTさん】

Tさんは、日本語によるセッションを実施することは、ヴィクトリー・プレイセンターにとっても、ヴィクトリー地区にとってもプラスに働くのではないかと感じ日本語セッションのスーパーバイザーになることを快諾した。しかし、設置当初は、日本人の家族がなかなかプレイセンターに馴染まなく、活動の継続に苦労したと語っている。当時の親たちが、子どもと一緒に遊ぶのではなく、自分たちのおしゃべりに夢中になっていたことがTさんには特に印象に残っている。Tさんは、初期の頃の日本語セッションについて、「育児の交流グループ (Coffee Group)」のひとつに過ぎなかったと当時を振り返っている。さらにTさんは、日本語が全く話せない自分自身に対し、「私はよそ者なのだろうか」と疎外感を感じることもあったと述べている。その時の様子をTさんは、以下のように語っている。「私以外の人は、ずっと日本語でおしゃべりをしているし、私が日本語や日本文化、日本の遊びを教えられるわけではないので私には難しいチャレンジなのかもしれない」と。しかし、Tさんの使命は

日本文化を伝承することではなく、「一人の大人としてプレイセンターの遊びを子どもと共に楽しむこと」や「遊びに対する考え方と遊びを提供する方法を親たちに伝えること」、「日本文化を次世代に継承することの手助けをすること」なのだと考え直した。具体的にTさんは、参加する親たちに対して「ここは、子どもたちの場所なの」と積極的に話しかけるように心がけ、毎週新しい遊びのコーナーを紹介することにした。Tさんのこうした地道な働きかけが功を奏し、現在では「子どもと一緒に親が遊ぶこと」の重要性を親自身が理解するようになってきている。そして、以前には、子どもにさせたがらなかったフィンガーペインティングや汚れる遊びでも親子で一緒に楽しめるようになってきているという。Tさんは、親たちが子どもの自主性を尊重するようになったことが一番の変化であり、成果であると述べていた。

最後に、日本人の親たちの全体的な傾向として、予め準備した遊びを全員で揃って行う傾向があるのではないかとTさんは指摘する。現在の「たんぼぼ」では、このような遊び方は殆ど見られなくなってきたが、大人からの一方向的な遊びの提供はプレイセンターで推奨している遊び方とは相反するため、今後は、より多くの親たちに学習コースを受講してもらい、「子どもがなぜその遊びを選ぶのか」、「その遊びによって子どもは何を学ぶのか」について親自身が考えられるように促していきたいと語っている。

#### 【アシスタント・スーパーバイザーYさん】

Yさんの発案で始まった日本語セッションだが、Yさん自身の子どもはすでにプレイセンターを卒園している。Yさんは、現在もアシスタント・スーパーバイザーとしてプレイセンターに残り、日本語セッションを支えている。Yさんが日本語セッションを始めたばかりの頃は、プレイセンター内の日本に特化した活動であることに対して、その物珍しさから参加を決める親が多かったという。だが、現在は、出産などで一度プレイセンターから離れても「たんぼぼ」の活動がしたいと戻ってくる意欲的な親が増えたそうだ。

これまでYさんは、当番や係の仕事をなかなか親たちに割り振ることが出来ずにいた。しかし、3年目を迎え、徐々に参加者全員でセッションをまわす機運が高まってきたという。現在は、当番表なども親自身がローテーションを組んで作成するようになってきている。Yさんは、「たんぼぼ」に参加する親について以下のように語っている。

「私、時間作ってプレイセンターの仕事できるよ」とか「自分たちの子どものことだから、私もなにか協力してやるわ」というお母さんが増えてきてくれたので、仕事も分担してできるようになりましたね。そういう意味では、少しずつ子育てを共有するということが理解できるようになりました。プレイセンターの活動について分かってきているお母さんたちが増えてきているのかなってという実感はありますね。

スーパーバイザーやアシスタント・スーパーバイザーと一緒にセッションを担当する親は、プレイセンター内でペアレント・ヘルプと呼ばれている。ペアレント・ヘルプは、交代で絵本の読み聞かせや遊びの提供をしている親を指し、産前産後6カ月は当番役割から免除され

るという規定が「たんぼぼ」にはある。しかしながら、現在の「たんぼぼ」では、産前産後の親以外でも当番をする自信がなく当番をしていない親が数名いるという。

やっぱり一人目のお母さんと「人前で本読んだりするのはできないわ」とかいう人もいるし、あと子どもが、二人目が赤ちゃんだったりすると、絵本の読み聞かせしている途中で泣き出したりするから、ゆっくり読めないとか、そういうのもプレッシャーになったりするので、ペアレント・ヘルプもできる人が今のところはやるっていうことになっています。

Yさんの語りからもわかるように全員ではないものの、可能な親が少しずつ運営にも参画するようになってきている。今後は、当番をしていない親にも他の親たちが当番をする姿を見てもらい、親自らが当番をやりたいと思えるような環境づくりを目指していきたいという。そして、親自身の心の準備ができ次第、当番やセッションの担当を行ってあげたいとYさんは考えている。

「当番を上手にしようとか、失敗したらどうしようとか、そういうのはみんな、誰も思わないから、自分の気持ちがレディー（準備状態）になったらやってほしい」と親たちには言っている。今、中心になって当番をやってくれているお母さんたちもそのこと理解してくれているので、自分から当番をしたいと思う気持ちになるまで待ってあげてほしいという感じ。

以上に示してきたとおり、初期の頃は、ヴィクトリー地区に出来た新しい日本の活動として興味を持ち参加する者が多かった。だが、活動開始から2年経った今は、プレイセンターの理念や運営方法を理解し、プレイセンターを選んで参加する親が多くなってきている。そのため、係の分担や遊びの提供についても親自らが担当するようになってきており、Yさん自身もこのことを高く評価している。「たんぼぼ」の活動が開始されてからまだ数年しか経っていないということもあり、会としては発展途上の段階にある。しかしながら、この2年間で参加する親の層にも変化がみられ、よりプレイセンターらしい活動になってきているとYさんは繰り返し語っている。

### 3-5 「たんぼぼ」が抱えている課題と今後の抱負

「たんぼぼ」に参加する親たちのプレイセンターに対する満足度は相対的に高く、「読み聞かせ、日本語の歌など現在の活動をそのまま続けたい」といった現状維持を望む声が多かった。ニュージーランドのなかの日本に特化した活動ということもあり、大半の親が今後の抱負として「日本語を話す活動にしていこう」とか「日本語を話す友だちと遊び、楽しいと思えるようなセッションにすること」をあげていた。

他方、スーパーバイザーたちは、どのように活動への課題や抱負を考えているのだろうか。

以下に示していくことにしよう。

【スーパーバイザーTさん】

Tさんは、現在の「たんぼぼ」は活動が安定してきており、危機的な問題は生じていないと語っている。今後もスーパーバイザーとして日本語セッションをサポートしていきたいとTさんは述べており、継続参加の意思を示しているが、その意欲を掻き立てたのは何よりも親の変化にあったという。その変化のなかで、特にTさんが大きな変化であると捉えた変化は、自分の子どもをTさんのもとに残し、別のコーナーでよその子どもと遊ぶ親が増えてきたことである。また、父親がニュージーランド人の場合には、その子どもは日本文化を失いやすい環境に置かれるため、子どもにとっても親にとっても日本語のセッションを開催することは意味のあることなのだとしてTさんは語っている。

Tさんが指摘する「たんぼぼ」の課題は二つある。第一に、セッションを開くために必要な10人の子どもを今後も確保できるかどうかということである。一時期、「たんぼぼ」では、ベビーラッシュが起き、参加できる子どもの数が6人に減少したことがあった。Tさんは、親が産休をとるのは当たり前であり、休会することに対しては賛成している。しかし、その親たちは結局、「たんぼぼ」には戻ってこなかった。Tさんは、この経験を生かし、産休しても戻りたくなるようなセッションを展開していくことが今後の「たんぼぼ」に求められる課題であると指摘する。現在の「たんぼぼ」には、15人の子どもが参加しており、産休明けも戻ってくる親が増えてきてはいるが、参加者はその時期によって増減の波があるので、参加者の在籍率の安定化を図るためにも日本人に限らず、日本文化や日本語に興味を持つ親子が誰でも日本語セッションに参加できるよう広報活動を推進していきたいのだとその抱負を語っている。

二つ目の課題は、親の学習についてである。通常のプレイセンターでは、親が保育者役割を担うことから学習コースの受講が義務化されている。しかし、日本語セッションでは、スーパーバイザーであるTさんとアシスタント・スーパーバイザーのYさんが常にセッションの責任者として在任している。すなわち、2名の有資格者と1名のペアレント・ヘルプ(当番の親)がいれば、国の認可基準を満たしセッションの開催ができる。そのため、親の学習や資格の取得が通常のセッションほどには進まないのが現状となっている。また、学習を義務化してしまうと参加者が集まらないのではないかという懸念もあり、学習コースの受講を日本語セッションでは義務化していない。「たんぼぼ」のメンバーのうち数名の親は、コース1やコース2を独自に進めているが、全員が揃ってコースを受講するまでには今のところ至っていない。

Tさんは、親の学習があってこそそのプレイセンターと考えているため、学習については、日本人の親たちに対してもさらに興味を持ってもらいたいと期待している。プレイセンターの教育提供者として資格を持つTさんは、日本語セッション内で講座を提供するなどの工夫をしながら、今後は日本語セッションの親たち全員がコースを受講できるように変革していきたいと述べている。

【アシスタント・スーパーバイザーYさん】

Yさんは、二人の子どもが小さいうちから日本の文化や言語を息子たちに継承していきたいという思いでいた。そうした理由から日本語セッションの開催を試みることにしたが、日本語を使って遊ぶ会もプレイセンターのなかで活動をするからこそ意義があるのだとYさんは実感している。

基本的に、親も一緒に参加するっていうのを条件にしている。「じゃあ、ここにあなたたち居て。じゃあね」と言って、お母さんが（子どもを置いて）帰っちゃうのでは、ちょっと意味がないのかなって思います。お母さんたちも絶対参加。最初1年目は興味本位で参加して、結局、続かなかったお母さんたちもいた。今のお母さんたちは本当、子どもたちになにかしてやりたいっていうお母さんたちが多いです。

「たんぼぼ」でのセッションもプレイセンターの一活動となるため、プレイセンターの理念である「Families growing together（家族と一緒に成長する）」が大切にされ活動が推進されることになる。Yさんは、今後の課題として、よりプレイセンターらしい子どもへの関わり方ができる親を「たんぼぼ」のなかで増やしていきたいと語っている。しかし、これまでの活動のなかでは、日本人の親特有の子ども対応が垣間見れる場面があり、プレイセンターのやり方とは違うのではないかと感じることもあったそうだ。

子どもの水遊びって、ただ単に水を何回も何回も汲んだりすることなんですよね。だけど、日本人のお母さんは「冬だから、風邪引くから、冷たいからやめなさい」と言うの。でも（通常の）プレイセンターでは、「え、それでいいんじゃないの」と考えるから。ただ着替えればいいだけのことだし。あきちゃったり、寒くなっちゃったら、本人がそう思ったらやめるし。そこをなんか「いや、もう汚れるからやめて」とか「汚いからやめて」って言ってしまうと、それで遊びが中断してしまう。確かに、大人から見ればそうなのかもしれないけど。

日本人の親たちには、「汚さずに遊ぶこと」や「大人側が発案した遊びを子どもに教える」といった傾向が見られることを両スーパーバイザーは指摘している。例えば、親が子どもに「ハサミを使わせたい」とか「工作させたい」などと親の期待が前面に出てしまうことが多いのだという。Yさんは、「私たち自身がそういう教育を受けてきたから、そういう発想になってしまうのはある意味仕方ないこと」と述べている。確かに、日本の子育て支援やプレイセンターの一部の現場では、子どもの状態や興味の所在などを把握して遊びを展開していないことがある。むしろ、「親のねらい」や「支援者のねらい」が最初にきてしまっている。このような傾向になると、親は子どもに対し、常に遊びのアイデアを提案しないといけないと思うようになり、そのことが親の負担感を助長することにつながっている。しかし、ニュージーランドで展開しているプレイセンターでは、16分野のコーナー遊びを設定し、

多くの遊びの選択肢から子どもが自由に遊ぶことを推奨しているのに、日本人の親が抱えているようなストレスが見られることはまずない。

Yさんが示す「たんぼぼ」の課題は、Tさんと同様に大きく二つに分けられる。一つ目は、プレイセンターらしい運営や子どもに対する関わり方を日本語セッションにおいても浸透させていくことである。観察記録や一人ひとりのプロフィール（保育記録）も現在は、スーパーバイザーの二人が記録をつけている。しかし、Yさんは、これ以上子どもの数が増えたらスーパーバイザーの二人だけでは対応することが不可能になるのではないかと懸念している。今後は、親たちにも少しずつ「子どもを見ることの大切さ」を伝え、やがてはお互いの子どもの観察記録がつけあえるようになってほしいと願っている。

二つ目は、Tさんと同じように親たちの学習コースに対する関心を高めていくことである。

コース2を勉強し始めている「たんぼぼ」のお母さんも一人いるので、「彼女も始めたからどう？」っていう感じで、他のお母さんたちも「誰々さんも始めたよ」みたいな形で相談していこうかなど。あと、Tさんが、「週に1回しか日本人の親はプレイセンターに来ないから、セッション中に希望者が例えば5人でも集まれば、私がコース1の講師をしてもいいよ」って言うてくれているので、皆に声がけしようと思っています。

Yさんは、以前にも親たちに対し「コース1をやってみない？」と声をかけたことがあったそうだ。しかし、親たちから得た回答は、「子どもが小さいので学習はできない」ということであった。筆者の調査では、子どもが小さいことを理由に学習ができないと回答する親はいなかったが、「自分に余裕ができたら学習したい」「英語が苦手なので参加できずにいる」「時間があり、学習にストレスを感じなくなったらやりたい」という意見が多かった。「余裕がない」や「時間がない」ことが「小さい子どもの子育て中であるから学習ができない」ということを意味するのかもしれないが、全ての親が「興味がある」「学習に抵抗はない」「学習するのは好き」と答えていたことは意義深い結果であるといえよう。

#### 4. まとめと考察

ネルソン市にあるヴィクトリア・プレイセンターでは、①遊びを通じて日本語や日本文化を経験すること、②プレイセンターの理念に基づいて親と子ども、そして互いの家族が共に学ぶこと、③子育てコミュニティを構築することを活動目的とし、2011年6月より日本語セッション「たんぼぼ」を展開している。

本調査では、ニュージーランドのプレイセンターで日本語セッションに参加する日本の親たちが、日本のプレイセンターで活動する親たちと比較してプレイセンターに対する価値判断を異にするのであろうかを探究してきた。両国の日本人の親たちは、「家族が一緒に成長できる」「異年齢遊びができる」「他の子どもの発達・成長が見られる」「セッション以外でも交流する仲間ができた」ことを評価していた。他方、共通の悩みとしては、「参加人数の

確保」と「学習会の定着が難しいこと」があげられた。次に相違点を示すことにしよう。日本語セッション「たんぼぼ」においては、日本の親たちが抱えている「活動場所の確保が困難であること」「外遊びができないこと」「ダイナミックな遊びが提供できないこと」といった課題は確認されなかった。やはり、プレイセンターの施設や遊びの環境が整っていることは大きく、「キッチンを使用して料理ができる」や「家の中ではさせたくない遊びを思いっきりさせられる」「ダイナミックに遊び、どんなに服が汚れても大丈夫」といった回答が「たんぼぼ」では目立ち、そのことが活動のメリットとして捉えられていた。

日本語セッションの場合には、「プレイセンターだから」というよりも、「日本語を話す環境にわが子を置きたい」という理由でプレイセンターが選択される傾向にあった。そのため、プレイセンターの特徴である「親による自主運営」「子どもの主体性を尊重した遊びの設定」「親の学習」が進みづらい状況を招いていた。しかしながら、「たんぼぼ」の親たちも活動に参加する過程においてプレイセンターの理念や特徴を理解するようになり、「親子と一緒に活動すること」や「遊びの提供の仕方」、「プレイセンターの仕事を分担すること」の大切さを認識するように変化していた。

以上のことを総括するならば、次のことがいえるであろう。「たんぼぼ」の親たちがプレイセンターに関わる当初のきっかけは、「日本語による子育て活動」であった。ところが、子どもの自主自由遊び (Child initiated play) の機会を担保するプレイセンターの環境とスーパーバイザーやアシスタント・スーパーバイザーの導きによって、徐々に親たちのなかにプレイセンターの精神が養われていた。そして、このことは親たちがひとりの親や保育者として成長を遂げるための契機となっていた。つまり、「たんぼぼ」の活動では、施設とスーパーバイザーというソフト・ハードの両面が整っていたということになる。そのため、日本のプレイセンター活動とは異質の課題を抱えていることがわかった。これまでの結果を踏まえ、「たんぼぼ」独自の活動課題を示すとすれば、それは「親に対する学習の徹底」と「親の主体的なセッション運営」となるであろう。

本稿で扱ってきた日本語セッション「たんぼぼ」の事例を参考に、日本におけるプレイセンター活動への示唆を考えてみると、やはり日本でプレイセンターが増加しない理由は、政府公認の幼児教育活動としてプレイセンターが認められていないことが大きい。つまり、親たちは、活動場所や資金繰りなどすべての準備を自前で行わなければならない、そのことがプレイセンター普及への足かせとなっていた。さらに、活動を継続的に支えるためには、豊富な人的資源が求められるであろう。日本の子育て支援活動や育児サークルの場合には、リーダーとなる親が抜けてしまうと、たちまち活動が閉塞化してしまう。<sup>7)</sup> その点、プレイセンターでは、上述の育児サークルなどとは異なり、活動を円滑にするためのスーパーバイザーを配置している。仮にスーパーバイザーが不足するプレイセンターが増えてしまうと、他の育児サークルと同様にして後継者問題や人材不足で悩むことになる。だがその一方で、スーパーバイザーの配置が十分になされれば、その継続と発展は大いに期待できると考えられる。

今回の調査では、日本国内でプレイセンターの活動を促進していくためには、「常設で活動ができる施設の用意」と「セッションのリーダーとなる人材養成と人員確保」が不可欠な

要件となることが観取できる結果となった。

### 参考文献

- 1) 松川由紀子「ニュージーランドの幼児教育と両親参加」『日本保育学会大会研究論文集』（37），1984年4月30日，292-293.
- 2) 久保田力「ニュージーランドの就学前教育から学ぶ日本の「子育て支援」と「幼保一元化」の課題～「プレイセンター」と『テ・ファリキ』を手がかりに～」『子ども教育研究』子ども教育学会，第4号，2012年3月，57-68.
- 3) Powell et al. The effect of adult Playcentre participation on the creation of social capital in the local communities: A report to the New Zealand Playcentre Federation submitted by Massey University College of Education research team in collaboration with Children's Issues Centre. Palmerston North: New Zealand Playcentre Federation, 2005.
- 4) 佐藤純子『親こそがソーシャルキャピタル：プレイセンターにおける親の協働が紡ぎだすもの』大学教育出版，2012.
- 5) 佐藤純子「日本型プレイセンターに対するセンター代表者と参加家庭による活動評価」『淑徳短期大学研究紀要』第52号，2013年2月，95-116.
- 6) 七木田敦「ニュージーランドにおける子育て支援—プレイセンターにみる親育ちのスタイル」『子育て支援と心理臨床』Vol.6，2012年12月，26-32.
- 7) 江口愛子・森未知「子育てネットワーク等子育て支援団体についての情報提供の在り方に関する調査研究」国立女性教育会館研究紀要 Vol.7，2003年8月，109-117.